

平成10年(1998)9月7日黒沢明監督が亡くなります。『影武者』

で黒沢監督と袂<sup>たもと</sup>を分かつたままだった勝<sup>まさる</sup>にとって監督の

死はショックそのものでした。死後1ヶ月ほど経<sup>た</sup>ってから

関係者<sup>かんけいしゃ</sup>に送<sup>おく</sup>った手紙に

一黒沢さんが亡くなって、生存中は私<sup>わたし</sup>の中の甘えが黒沢

さんとの接点<sup>せつてん</sup>になっていましたが、亡くなって初めて私に

密着<sup>みつちやく</sup>した存在<sup>そんざい</sup>で、私<sup>わたし</sup>の3/4は黒沢さんと切り離<sup>はな</sup>せない

偉大<sup>いだい</sup>な方<sup>じっかん</sup>だったと実感<sup>じっかん</sup>しており、このような方<sup>よ</sup>に寄りかかれ

たことを幸<sup>とも</sup>せに思<sup>ほこ</sup>うと共に誇<sup>ほこ</sup>りに思<sup>ほこ</sup>っています。一

と心情<sup>しんじょう</sup>(※90)を述<sup>の</sup>べています。

※90 心情

心の中の思い。



そして、黒沢監督が最後に残したシナリオ(※91)『雨あがる』

えいが か さんか  
の映画化に参加することになります。

えいが たんとう  
この映画の担当することが決まった時、

「『影武者』で退学した黒沢学校にやっと戻れました。18

年ぶりに手にする黒沢明と名前の入った本を受けとり、私の

えいごころ こうよう  
映画心は高揚(※92)しております。小品ながら中々良くでき

た本で、行間から黒沢さんの体温が伝わって参ります。」と  
語っています。

まさる  
勝はこの仕事を受けるに当たって、万全を期すため、東京

いだい がんか  
医大の眼科へ通います。そして更に次のように決意を述べて  
います。

#### ※91 シナリオ

へんか じゆんじょ  
場面変化の順序、せりふ、動作などを書いたもの。

#### ※92 高揚

こうよう  
高まり強くなること。

「<sup>こんど</sup>今度の仕事で 98 人目の<sup>かんたく</sup>監督で 308 作品目になり、<sup>わたし</sup>私の  
<sup>いさく</sup>遺作になっても<sup>は</sup>恥ずかしくない作品にしようと張り切ってお  
ります。

<sup>えいが</sup>映画音楽の<sup>えきす</sup>エクス(※93)のような<sup>わたし</sup>私の<sup>きゃりあ</sup>キャリア(※94)によ  
<sup>ごくい</sup>る<sup>ごくい</sup>極意(※95)と言うか、全く新しい<sup>しんせん</sup>新鮮な音楽と<sup>えいぞう</sup>映像による  
<sup>ひょうげん</sup>表現を楽しみにしておる次第です。」

※93 エクス

<sup>もつと</sup>よりぬきの最も大事なところ。

※94 キャリア

<sup>つ</sup>積み重ねた<sup>けいけん</sup>実地の経験。

※95 極意

ひけつ。

そして、映画が完成した後、

「『雨あがる』を終え、近年にない安らかな気分を味わっております。『影武者』でノンちゃん(※96)に言われた作家が精神の高揚を失ったらオシマイよと言ってもらって降りた人間の敗者復活の仕事でした。監督補佐に付いたノンちゃんのお陰で伸び伸びとした音楽が書けました。黒沢さんも守護霊(※97)となって助けてくれたような気持ちです。」となにか悟ったような心情が吐露(※98)されています。

しかし、この308本目の映画が佐藤勝の遺作になるとは誰も思っていないでした。

※96 ノンちゃん

野上照代さん

※97 守護霊

人などに付きその対象を保護しようとする霊のこと。

※98 吐露

気持・意見などを隠さずに他人にうちあげ述べること。